

特集―好きな作品を選び、自ら取り組もう

「好きな作品を選び、自ら取り組もう」をどう扱うか



国語の教材を考える会

「好きな作品を選び、自ら取り組もう」。まず、このことの意味を教師自ら確認し、生徒にも考えさせたいと思います。一般の授業では、「教材」も「学習方法」もしたがって「学習の流れ」も決まっています（決められています）。ここでの学習は、この既成の学習観を打ち破り、生徒自身に、「この教材」で「こんな学習をしたい」という意欲をもたせることから始めます。教師は、生徒のこの意欲を持続させ、手助けする立場に回る、このことが肝要です。そのためには、すべての生徒に同じ学習をさせ、同じ力をつけるという考え方に立つのではなく、生徒一人一人が、自分の選んだ教材で、やってみたい学習方法を選び、自分のもっている国語の力を駆使して自ら学んでいく、その過程で自分の力を確認し、課

題を見つけ、解決していくのだという考え方に立つ必要があります。

まとめ学習の場として扱う

この「好きな作品を選び、自ら取り組もう」は、補充的な学習の場として扱うことも、発展的な学習の場として扱うことも可能です。いずれの場合も、今まで学び、身につけてきた国語の力を発揮させる場、特にこの一年間に身につけてきた学習の成果を確認させる場を用意し、生徒各自に、「一年間の学習のまとめ」だということ意識させます。そのためには、ここでの学習のねらいを明確にし、生徒に自覚させて、学習に取り組ませたいと考えます。

生徒が学び方を選択し、互いに学び合う学習

この「好きな作品を選び、自ら取り組もう」の学習の成否は、生徒が自分のやることをはっきり理解し、その上に立って自覚的に取り組んでいるかどうかにあります。したがって、まず生徒の苦手意識を取り払い、自分にもできそうだという思いにさせる必要があります。そのための配慮事項を学習活動の流れに沿って掲げておきます。

最初に、学習の流れ、学習の手順などの見通しを示す。

ここで、どいついつ学び方をしていくのかをはっきりさせる。

学び方や取り組む場面などを、生徒が選べるようにする。

生徒が自分で、自由に工夫できる余地を残しておく。

発表の場では、生徒がアドバイスし合う場を用意する。

自己評価、相互評価では、プラスの面を見つけさせる。

この六項目を踏まえて、以下で、扱い方のポイントを具体的に記します。

I 一年間の学びを振り返る

この一年間に取り組んできたいろいろな学習内容や学習方法、学習形態などを生徒に思い出させ、黒板に書き出したり、ワークシートに書き込ませたりします。一年間の最後の学習らしく、教科書の目次や「学習の計画を立てよう」を見ながら振り返らせるといいでしょう。そして、自分がやりやすかった学習や楽しく取り組めた学習、力がついたと思う学習を。で囲み、自分と国語とのかかわりを振り返らせませす。

II 学習の進め方を各自で決定する

ここでの目標は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域ごとに示すこともできますし、それらを含め統合した形で示すこともできます。いずれにせよ、生徒には、行動目標の形で示すようにします。例えば、「内容に興味もてるようなブックトークを行う」「フリップを作るなどしてニュース番組風に内容を紹介する」「内容がよくわかるパンフレットを作る」「内容をわかりやすく図解して説明する」といった具合です。必ず、工夫を促すように、「わかりやすく」などの言葉を添えます。もし可能なら、で確認した、この一年間に取り組んだ学び方の中から学習の進め方を生徒に選ばせたいものです。まとめ方や学び方は「学習の窓」を活用すると便利です。

III 学習活動の流れを明確に示す

教材はいくつかの場面に分けておき、どの場面を選び、どんな学習活動をするか、そのために、グループで取り組むか個人で取り組むかを考えさせ、選択させます。その場合、教師の側ではそれぞれの学習活動では、どんな国語の力が必要となるか考えておきます。特にグループで取り組むときは、生徒の能力や意欲について配慮し、

苦手な生徒にとっても十分楽しく活動できるように工夫したいものです。

IV 内容の要約【読むことの学習】

発表するために用いる時間は、グループの場合も個人の場合も、五分程度に制限しておきます。制限時間を設定することは、要約の必要性を明確にすることになり、生徒にとっては取り組みやすくなります。発表の方法によつては、文章にまとめたり、箇条書きにしたり、図式化したり、キーワードを書き出したりという活動も必要となります。教材に書かれていない事柄を補足するということもあるでしょう。しかし、条件は、時間内に読み取った内容を、的確にわかりやすく伝えるということです。これは、そのまま評価項目となります。

V アドバイスと手直し【話すこと・聞くことの学習】

説明、あるいは発表させる前に、生徒がアドバイスし合う場を設定しておきます。アドバイスには調べる事柄や調べ方などに関することと、まとめ方や発表の仕方に関するものがあります。いずれの場合も、二グループまたは三グループをひとまとまりとして、できたところまでを互いに発表します。その際、調べる事柄や調べ

方に関しては、行き詰まっているところ、アドバイスを受けたいところを発表し、アドバイスをさせます。まとめ方や発表の仕方に関しては、実際に発表してみても、やりわたりやすくするためのアドバイスをさせます。発表する際には、自分がその部分を選んだ理由や工夫点も述べさせるようにします。そして、必ず一人が一つは質問するか、アドバイスをするという約束をしておきます。質問やアドバイスは、内容をしっかりつかんでいなければできないことなので、これらは、条件であると同時に評価項目となります。終わったら、残りの時間で、アドバイスされたことを基に修正したり付け加えたりして、完成させます。

VI 説明あるいは発表、そして評価【書くことの学習】

学習活動のまとめとして、読み取ったことや調べたことを表現する学習場面を設定します。報告文や解説文を書く場合もあるでしょう。それらを含むパンフレットや図解、フリップのようなものを作る場合もあるでしょう。いずれの場合も、個人の活動にするかグループの活動にするかを明確にして、生徒自身にその準備をさせておきます。

また、できるだけVのアドバイスをする場や中間発表

の場を設けたいものです。そうすることによって、それまでの学習成果を出し合い、苦手な生徒が安心して発表できるようにするからです。

ここでの評価は、一年間の成長を確認するのが第一のねらいです。例えば、相互評価では、同じ内容を扱ったグループあるいは個人に対しては、内容のまとめ方の正確さについて評価させ、他は、どういう工夫が、どういう効果をあげていてよかったのかを評価させるようにします。自己評価では、自分が選んだ学び方、内容、発表の仕方などについて選択理由を書かせた上で、どういうことをねらって、どういう工夫をしたのかを言葉で表現させるようにします。

さらに、よりよいものにするためにはどんな工夫が考えられるか、今後取り組みでみたい学習方法やまとめ方を書かせたりすることによって、次の学年への課題意識をもたせるようにしたいものです。

伸びを確かめるのが評価

ここでの学習のねらいは、この一年間の学習を踏まえて、どれだけの伸びがあったかを生徒がそれぞれ確認すること、そして、国語の学習は楽しいものだ、もっと国語の学習をしたいという思いをもたせることにあります。

評価としては、学年の最後の段階なので、基本的には学習指導要領の各学年の指導事項が評価項目となります。この学習を通してすべての領域の項目をチェックすることも不可能ではありませんが、領域を絞って「関心・意欲・態度」と「話すこと・聞くこと」、「言語事項」だけにするといった方法もあります。その場合、のアドバイス時間に、どのような質問やアドバイスができたか、話し合いはどのように進められたかなどが評価項目となります。

しかし、できれば「関心・意欲・態度」を重視し、学習過程の途中で示したような評価項目に基づいて、その生徒の伸びた部分をほめ、うまくできたことを生徒各自に書き出させ、仲間からの評価を参考に、次への課題や意欲をまとめて終わりにしたいと思つのです。

